

図書館法改正と「メディアの中の図書館のイメージ」 法改正の年に文学作品に描かれた図書館は？ 事例研究 「レファレンス・カウンターの難問」を中心に

—— 図書館はどうみられてきたか・10 ——

佐藤 毅彦

What relation are the library law revision and image of library in media.
How library was drawn in literary work at the year of the library law revision.
The case of *Difficult Problems of Reference-counter*.

—— Image of Library (10) ——

SATO Takehiko

Abstract : These papers consider how library was drawn in literary work at the year of the library law revision. The realities are not reflected about the system of the staff and the librarian qualification. There was a novel that depicted the reference service done at the library. In this novel, the monetary situation of the library and local government had been treated. It was a content to forecast a part of changing libraries by the library law revision.

要旨：図書館法改正の年に、図書館に対する社会的な見方をあらわしているひとつの事例として、文学関係の領域で図書館をあつかった作品を分析した。図書館の職員体制と「司書」資格については、現実の状況が反映されたものになっているとはいいがたい部分がある。図書館で提供される「レファレンス・サービス」を扱った作品も存在するが、この中では、図書館と地方自治体の財政事情についてもふれられていた。図書館法改正による図書館の変化の一端を予測させる内容であった。

1. はじめに

1950年に公布されて以来、図書館法に関して実質的な内容の変更が行われたことはこれまでなかった。教育基本法の改正をうけ、社会教育関連の法規が見直されることとなり、2008年6月に、図書館法を含む法改正が行われた。『図書館雑誌』2008年9月号は「特集★図書館法の改正をめぐる」を掲載している¹⁾。この号に文部科学省の担当官がよせた「図書館法等の改正と今後の課題について」では、「今回の『社会教育

法等の一部を改正する法律案』は、まさにおよそ半世紀ぶりの大改正であった」とされ、「これまでの日本図書館協会や『これからの図書館の在り方検討協力者会議』等における議論も踏まえ」て検討されたとのことである²⁾。法改正の内容については、特集記事の中でも、批判的にとりあげているものもあり³⁾、今後の動向に注目があつまっている。また、社会教育関係雑誌でも、特集が組まれ、社会教育・図書館・博物館、3者の関係者がそれぞれ関連する立場から発言している⁴⁾。

今後の日本の図書館状況に大きな影響を与えるもの

と考えられる、図書館法改正の年に、文芸関係で図書館をみつかった作品をとりあげ、その分析をこころみ³⁾。「図書館はどうみられてきたか」をテーマとする研究の一環として、法改正と同じ年に、図書館が、文学作品の中でどのように扱われていたのかを知ることによって、図書館に対する社会的な受け止め方の一端を明らかにすることができるのではないかと考えた。

2. 受賞作家・受賞作品と図書館

——『決壊』『ぼくは落ち着きがない』

『吉野北高校図書委員会』

2008年前半には、芥川賞受賞経験のある作家の作品に、図書館・図書館員が登場しているものがあり、一部で話題となった。また、社会的な認知度は芥川賞に比べれば低い、メディアファクトリーの「ダヴィンチ文学賞 編集長賞」を受賞した作品も、学校図書館を舞台にしたものであった。

・平野啓一郎『決壊』

平野啓一郎は、『日蝕』で、1998（平成10）年、第120回芥川賞を受賞している⁴⁾。2008年に刊行された『決壊』には、国立国会図書館職員が、主要なキャラクターのひとりとして登場する。上巻の帯には、「エリート公務員である兄・崇」とあり、「沢野崇」が、国立国会図書館職員という設定になっている⁵⁾。

この人物の経歴については「高校まで生まれ育った北九州市の公立高校で過ごした後、現役で東京大学文科一類に合格し、大学院人文社会系研究科に進学した後、一年で退学して国立国会図書館に入館している。98年には、外務省に出向し、ブリュッセルの大使館で一年、ストラスブールの領事館で二年勤務し、昨年帰国して、現在は国会図書館に戻り、外交防衛関係の調査員をしている」（下巻、p.104）と、紹介されている。

弟の殺害犯として疑われ「『色んな意味で、印象的な生徒でした。確かに勉強はよくできましたけど、こまちゃくて、大人をバカにしているようなところがあって、教師たちの評判は最悪でした』当時の担任は、そう辛辣に評する」（下巻、p.104）と報じられる。一方、勤務先の部下の男性は「『我々の仕事は、国会議員の依頼に応じて、立法に関する様々な問題の調査・資料作成を行うのが主ですが、Aさんは議員の間でも特に評判で、自民、民主両党の若手議員たちから政治家にならないかと常々、熱心に口説かれています。本人にその気はないみたいですが』『ただ、本心が見え

ないというか、Aさんが本当は何を考えているのか、分からないところはあります。どこかニヒルに世界を見ているというか……』」（下巻、p.105）とコメントしている。

勤務先である国立国会図書館や、そこでの業務内容については、それほどくわしく描かれているわけではない。たとえば「『夏休みこそ、忙しいのかな、国会図書館なんて？』『さァ、司書さんはね。崇は調査員やけ、そうでもないやないかね』」（上巻、p.20）とあるが、現実には、国立国会図書館に「司書」という職名は存在しないし、採用試験を受験する際に「司書」資格は不要である。図書館の利用者については「国会図書館の西口ロビーには、休暇中に貯め込んでいた調べものを片づけようと足を運んだ閲覧者たちが、昼食後の倦怠感に浸ってぼんやりと佇んでいる」（上巻、p.346）という描写がある。業務の内容としては「民主党の若手議員から、湾岸戦争後、九一年にイラクで起こった全国的な武装蜂起に関する資料を、一時を締め切りに依頼されていた」（上巻、p.346）とあり、国会議員の調査依頼に対応していたことが示されている。

「昨年末までの三年間、彼は国会図書館から外務省に出向して、一年目はブリュッセルの大使館に、残りは一ヶ月はストラスブールの領事館に赴任していた」（上巻、p.63）ということで、弟との対話では、日本に帰って、元の仕事についていることに関して「『停滞感はあるよ。三年間も遠ざかってた仕事を、前とまったく同じようにやってるんだから』」「『これは口外できないことだけど、実際、外務省に残らないかっていうことを、帰国間際には、ストラスブールの領事に随分と熱心に言われてたんだよ』」（上巻、p.124）「『帰国して、図書館の調査員に逆戻りして、政治家の答弁のための資料なんかを作って……もちろん、それだって立派な仕事だけど、兄貴はそれで満足なの？それが兄貴のしたいことなの？』」「『兄貴みたいに、やろうと思えば何でも出来るような人が、自分の能力を社会の中で全然発揮しないまま生きてる姿を見ると、僕は何て言うか、もどかしい気持ちになるよ』」「『大学でもそう。研究者になるように、教授に熱心に勧められてた時でも、そんなふうにして自分を認めてもらった時点で満足して、途中で投げ出しちゃうんだ。だけど、それが何になるの？』『買い疲れ過ぎだよ』」（上巻、p.125）と述べている。

国立国会図書館に勤務する人物が、優秀な職業人という印象で登場しているが、図書館の様子や図書館業務については、くわしくふれられているわけではなく、

国会議員の依頼に応じて世界情勢などの問題について調査している、という業務内容が示されている程度である。また、この人物は幼少時から優秀さを認められてはいたものの、一方で、全面的に肯定評価ばかりでもなかったことは、事件に関連して関係者が語っている。

なお、『決壊』については、現在、国立国会図書館に勤務している、河合将彦が、「本書を読み終えた人が、男性図書館員（またはNDL職員）にどのようなイメージを持ったのか、一男性NDL職員として大変興味ふかいところである」と述べている³⁾。

・長嶋有『ぼくは落ち着きがない』

長嶋有は、『猛スピードで母は』で、2001（平成13）年、第126回芥川賞を受賞している⁴⁾。その作者が、2008年に刊行した著書に『ぼくは落ち着きがない』がある⁵⁾。

「桜ヶ丘高校の図書室のもろもろを取り仕切るのは『図書委員』と『図書部員』だ。図書委員は、クラスから一名ずつ選抜される。昼休みや、ときには放課後も拘束される図書委員に立候補したがる人は稀で、大体『委員』というものを皆は嫌がる」し、「推薦で仕方なしに選ばれた者は、なにかと口実をつけて図書室の業務をサボ」るので「自発的に図書室の管理運営を執り行う『図書部』が発足」（p.18）した。図書部員がカウンターに入って手続きや書架への返却をしているが、職員については「白衣を着ていたから科学の先生だと思ったが、金子先生は図書室の司書だった」「もうこの学校にいない」（p.10）「少し前まで図書室には司書の金子先生がいたのだが、やめてしまった。」（p.29）とされている。

「部員の皆が金子先生を慕う理由はいろいろあるだろうが、その理由を話しあったことがない。優しいとか、世代が割と近いから話を分かってくれとか、そういう言葉になるのかもしれないが、望美の会いたかった理由ははなはだ男子的なもので、金子先生がスタイルのいい美人だからだ」（p.52）「年上のお姉さんキャラ」「そうした年長の人は金子先生がぴったり」（p.78）と評される人物であり、後半では、文学の新人賞を受賞している。『『受賞の言葉』のページには金子先生の顔写真も掲載されていた」「紙質もよくないし白黒だったが、それでも先生の美しさは伝わる写真だった。いつもの少し（なんにかは分からないが）誇らしげな顔より、やや堅めの表情」（p.122）をしているようにみえた。掲載されているコメントでは「十代

を正しく無為に過ごし、二十代はいろいろ面白いぐらゐに間違えました。遅れてやってきた自意識と戦い、さまざまなハラスメントを鈍感さで乗り切ったところで三十代。読み、書くことで世界を知り、受賞したことで、今後なにが起きても自分は勝ちだと思えるようになった。自分の出会ったすべての異性に感謝。あ、同性にも！」（p.122）と述べている。

『僕は幽霊探偵』という架空の本をめぐる「特に人気のある本は複数冊購入してはどうかと会議になったことがある。公営の図書館が現にそうしているからだ」（p.84）とあり、ハリー・ポッターの新作が何十冊も入荷しても、三百人待ちだという状況が紹介される。先生がもう一セット買うか、と提案したのに対して、図書部の部長は「図書館というものは、断じて、人気のある本をてっとりばやく読むための施設ではない。たとえそれが少数でも、どこかの誰かが読みたいと願うあらゆる本を、長く保存して未来の読者に託す場所なのだ」（p.85）「貸し出しカードに捺されたハンコの日付が十年以上前のことがある。前に借りられたのは十年以上前ということだ。そんなとき望美は部長がいった言葉を興奮とともに実感する」（p.85）という場面があるように、部長の見解にメインキャラである望美が、共感を示していることから、これは作者の意見と同じ方向性であると考えてよいのではないか。

長嶋有の近年の出版物については、表紙カバーうらに、仕掛けをするなど、「図書館で借りて読むのではなく、買って読んでほしい」ので、そのために、図書館で借りた本では、読むのが困難な部分に、なんらかの配慮をした装丁となっているとの指摘がある。『ぼくは落ち着きがない』も、表紙カバーうらに、本文の後日談が記述されている⁶⁾。そこでは、登場人物のひとり、渡辺為（ナス先輩）は、本文中で『『皆は知らない、俺は作家になります』』（p.205）と宣言していたが、後日談をみると、「大学で司書の資格をとり、県立の図書館に勤務した」「小説家にはならなかったが、挫折感はなかった。なれなかったのではなくて、ならなくてもいいと思えたのだから」とある⁷⁾。

・山本渚『吉野北高校図書委員会』

著者の山本渚は、『吉野北高校図書委員会』で第3回ダヴィンチ文学賞編集長賞を受賞、作品は文庫本として刊行された⁸⁾。表紙カバーには、「悩み、揺れ動く図書委員たちを描いた」とあり、高校生の図書委員たちの想いを、「川本かずら」の視点を中心に描いている。

舞台となるのは、一学年十四クラスある「吉野北高校は徳島県徳島市にある進学校」（p.19）で、各学年二クラスの特別進学クラスがある。図書当番は「昼休みか放課後、だいたい週に一、二回のローテーションで、生徒への貸し出しや、返却を行う当番のことで、これが図書委員の役割の八割を占めていると言える」（p.20）図書委員は真面目な北高の中でも地味（p.21）であるとされる。図書室については、「うちの高校の図書館は校舎とは別館になっていて、それがちょっとした離れみたいで、文学的な感じがする。校内で私が一番好きな場所だ」（p.9）と紹介されている。

川本かずらは『『図書カードが、学年変わって一ヶ月ですでに二枚目』（p.41）になっている。「中学の図書室は半分ないようなもので、ただの本置き場のようなものだった。誰も使わないから委員会すらなかったし、三年くらい新刊も入っていなかった」（p.42）が、高校では「夏休み後に統計した上半期の記録では、二年生の読書数一位は川本だったと牧田先生が言っていた」（原文のまま）（p.67）とあるように図書館をよく利用している。彼女は「司書の牧田先生」について「多分、二十代後半から三十代前半だと思われるのに、私より絶対可愛い」（p.10）「どうして牧田先生といいあゆみといい、私と違ってこんなにも女らしいんだろう」（p.12）「あゆみや牧田先生の可愛らしさに触れるたび『ちゅっ、いいなあ』と思って」（p.13）いる。高校卒業後の進路について「私は県内外のいくつかの大学と学部名を言った。すると、牧田先生が『あら』という表情で私の方を見る。その視線にちょっと恥ずかしくなって笑ってしまった」「『川本さん、司書志望なのね？』ちょっと嬉しそうに牧田先生が言って、私はハイと頷く。誰かに本を薦めたり、本を管理したり、この図書館みたいな場を作ったりそういうことをしたいと思ったのだ。『色々、相談に乗ってくださいね』と言うと牧田先生は『もちろんよ』と笑ってくれた」（pp.127-128）という対話をしている。

ここでとりあげた『ぼくは落ち着きがない』『吉野北高校図書委員会』は、いずれも学校図書館を背景に、そこに集まって活動する、高校生の「図書部」「図書委員」の姿を描いたものである。図書室のとなりに「部室」的なスペースがあり、そこは教室とは違った、開放感のある場所となっている。他方、学校図書館を活用した授業実践などはまったく登場しない。高校の中でも「図書室」の存在感は独特なものがあり、こうしたストーリーはありがちなものと思えるが、それは

学校図書館の可能性の一面的な反映でしかないのも事実であろう。ここにつどう高校生たちのほとんどは文科系のバックグラウンドをもった生徒であり、文学やマンガ・アニメなどの領域への造詣の深さは、一定程度あるにしても、それ以外の分野への関心の広がり希薄であるように思える。

学校図書館の担当職員は、二十代後半から三十代前半と思われる女性であり、その人物描写は、決して、否定的なものではなく、むしろ、読むがわが好印象をもつであろう描かれ方になっている。しかし、その評価のポイントはというと、容姿や文学賞に入選することなどが主であり、図書館に関心を示した登場人物の進路相談にのる場面（『吉野北高校図書委員会』）があるものの、全体としては、図書館員としての専門的な知識や技術が発揮されて、それが高校生の評価の対象になっているということではない。

なおこのふたつの作品でも「司書」という名称が使われている。学校図書館と、「司書」資格は、法的には、直接関係はない。「司書」が一般的な名称として使用され、「図書館での職務を担当している職員」という意味で使われていることになる。

3. 「レファレンス・カウンターの難問」

近年、本に関係する「日常の謎」¹⁾的なストーリーをメインに、その周辺に登場する人物を主要なキャラクターとした小説が人気をあつめ、一部の長編を含む連作短編のシリーズとして刊行されている。新刊書店を舞台に、ふたりの若い女性キャラクターが、本にまつわるさまざまな謎の解決に活躍する、大崎梢『成風堂事件メモ』²⁾、古書店を舞台に、大家族の人間関係と個々の人物に関連したエピソードとともに、毎回、本に関する謎が解明される、小路幸也『東京バンドワゴン』³⁾がそれである。いずれもこれまでに三点の単行本が刊行され、シリーズ化されていることから、一定の読者層の支持をえていることがわかる。

そうした中で、図書館、特に「レファレンス・カウンター」をメインの舞台とし、近年の自治体財政と公共図書館の事情を織り込みながら、図書館員が本に関係した謎を解きあかすストーリーを軸に、図書館の廃止につながりかねない財政危機への対応をもう一つの柱として、ストーリーが展開されている、門井慶喜「レファレンス・カウンターの難問」が、季刊誌『GIALLO（ジャーロ）』（光文社）に連載された日本雑誌協会によれば、『GIALLO（ジャーロ）』の部数は、

5,000部程度であり、近畿地区の図書館で購読しているのも、大阪市立中央図書館、などわずかな館で、多くの読者に読まれているとはいいがたい。今後単行本化され、一定の部数が発売されれば、さらに反響がよせられることが考えられる⁴⁾。なお、連載の最終回、最終ページでは「ご愛読ありがとうございました。〈レファレンス・カウンターの難問〉は、光文社より刊行されます」と予告されている (vol.34, p.117)。

・門井慶喜「レファレンス・カウンターの難問」

作者の門井慶喜⁵⁾は、これまで、単行本として『天使たちの値段』⁶⁾『人形の部屋』⁷⁾の二点を刊行している⁸⁾。「レファレンス・カウンターの難問」は、N市立図書館の調査相談係に勤務する和久山隆彦がメインのキャラクタとなっているシリーズで、6回掲載された⁹⁾。

- ①「図書館ではお静かに」「ここは勉強を手伝うところではありません……隆彦は溜息をついた」『GIALLO (ジャーロ)』29, 2007.10
- ②「赤い富士山」「閉館した児童図書館には、子供たちの夢がいっぱいつまっている」『GIALLO (ジャーロ)』30, 2008.1
- ③「図書館滅ぶべし」「仕事はじめ早々、副館長は新任の挨拶で図書館不要論をぶちあげた!?!」『GIALLO (ジャーロ)』31, 2008.4
- ④「ハヤカワの本」「元中学校長が未返却という図書館蔵書は、データ上存在しなかった」『GIALLO (ジャーロ)』32, 2008.7
- ⑤「最後の仕事」(前編)「図書館の存亡を賭けて、隆彦と館長の市議会証言が火ぶたを……」『GIALLO (ジャーロ)』33, 2008.10
- ⑥「最後の仕事」(後編)「図書館の存廃に中立な委員からの新提案は、さらなる紛糾を呼び……」『GIALLO (ジャーロ)』34, 2009.1

それぞれのストーリーにおいて、図書や文学に関連した謎が提示され、それを和久山たち図書館員が解決していく。

①は『「シンリン太郎について調べたいんですけど」』という相談なら、N市立図書館のレファレンス・カウンターに年に一度はかならず来る」(v.29, p.156)ということで、女子学生が尋ねてきた、鷗外を専門とする教授の出題したレポートの課題は、「林森太郎『日本文学史』を読み、考えたところを記せ。*最初から最後まで読む必要はない」(vol.29, p.158)というものだった。森鷗外の本名「森林太郎」と紛らわしいが

「リンシン太郎は」「林森太郎」のことで、「徳島県生まれ、文学博士、ほぼ鷗外と同時代の人」であり、『日本文学史』は「初刊は明治三十八年十二月。発行は博文館」(v.29, p.168)とのことであった¹⁰⁾。

②では「N市立図書館分館」であった公民館が閉鎖されることになり、和久山は、その場にいた人物に『赤い富士山』(vol.30, p.151)が表紙にある本を探してほしいと依頼される。『「題は違う……忘れた。しかし表紙にそれがあったのは間違いはない」』という本は、この人物個人のもので、小学五年生のとき、自分の本を持ってきた、当時の新刊本で、小説ではないという (vol.30, p.152)。結局、富士山ではなく、かたがちが似ていないこともない『東京タワー』(vol.30, p.164)が該当の本だということが判明する。

③では、N市立図書館の副館長として、市長秘書室から喜多田直次が転属、和久山たちに、研修と称してレファレンスの課題を示し、「結果を本庁に報告」(v.31, p.288)することになるだろうと言う。それは、「或る一つの語をタイトルに含む本。その語は、A 意味的には、日本語における外来語の輸入の歴史をまるごと含む。B 音声的には、人間の子供が最初に発音する音によってのみ構成される」(v.31, p.286)というもの。和久山は「最初の段階でいろいろお尋ねするのは、対象のしほりこみを迅速かつ正確にするために不可欠」(vol.31, p.286)であると、喜多田に対して、レファレンス・インタビューを行う。課題の回答は「アンパンマン」(vol.31, p.301)であった。

④では、「小さなお婆さん」が『「図書館には、何でも相談に乗ってもらえる場所があると、そう爺さんに言われて』』(v.32, p.308)レファレンス・カウンターにやってくる。爺さんが、図書館の本を、返却しないまま亡くなったという。「井波仙蔵」という名前で調べても「該当利用者はありません」(vol.32, p.311)と表示される。「早川図書が…」ということばから、出版社の「早川書房」「早川図書」が連想されるが該当するものはない。「早川図書」(はやかわ・としょまたは はやかわ・ずしょ)は、人名 (vol.32, p.327)で¹¹⁾、和綴じの写本を、教員であった井波仙蔵が、実物教育に使用するため、二十冊前後、特例措置で借り出したものだった。「データベースにも登録されないし、紛失本リストにも記載されない」(vol.32, p.328)という扱いになっていたのも、該当がなかったのである。

⑤で、和久山は、市議員である増川弘蔵から、本さがしを依頼される。よく知られている石原慎太郎

『太陽の季節』¹²⁾にある『例の、身体的器官でもって白い障子をつぎつぎと突き刺した』(vol.33, p.133)と似たシーンがあり、増川によれば、文庫本だったことは間違いない(vol.33, p.134)とのこと。石原の作品よりも、もっと高度な政治小説(vol.33, p.136)であるという。和久山は『小説を対象としたリクエストほど回答が難しいものはないんです』『とりわけ本文の一部について作品全体をひっぱり出せというのは』『まず無理だ。とんでもない偶然でも起こらないかぎり』(vol.33, p.137)と言っている。

⑥で、喜多田館長は、この件に対して「武田泰淳の短篇『異形の者』」であると回答する(vol.34, p.110)。和久山は書庫で、筑摩書房版『武田泰淳全集』¹³⁾を確認し、開高健の「解説」に、『太陽の季節』について「武田泰淳の先行作を思い出した人はほとんどいなかった。自分(開高)のほかには荒正人と臼井吉見くらいではなかったろうか」¹⁴⁾とあるのをみて「当時から具眼の士には知られていたと言うことではないか」と感じた(vol.34, p.112)。失望のため息をつく和久山に、調査相談係の同僚である樽本は『どんなに有能な図書館員でも、あらゆる相談をきれいに解決するなんて不可能だ』(vol.34, p.113)と励ます。

①で、和久山は「短大の学生にぶつけられたせりふ」「馬鹿丁寧な口調。もっと簡単にしゃべってよ。役人！」(vol.29, p.161)が頭を離れない。「大学で司書の資格を取り、公務員試験に合格し、あまつさえ一年目から希望どおり市立図書館に配属されたのだから仕事が楽しくないはずがない。定期刊行物の整理、貸出カードの作成、『週刊読書人』に載る選定図書週報のコピー……起伏にとぼしい作業に精出しながら、隆彦はおのれの幸運を信じて疑うことがなかった」(vol.29, p.162)しかし「図書館という施設がかならずしも行政機構全体において枢要な位置を占めないと気づいてしまった」(vol.29, p.162)「市議会議員のなかには公然と規模縮小論をとなえる輩も少なくない」「議会の連中の図書館費の金額の決めかた」は「公共工事だの中小企業支援だののお余りを『恵む』という気配があからさま」で「何より屈辱的なのは、館長のポストが、本庁の局長クラス——水道局長とか秘書室長とか——の天下りの定番といわれること」(vol.29, p.162)だと感じている。

N市は人口五十万強¹⁵⁾で「首都圏への通勤圏に属して人口密度はかなり高いし、交通もよく発達している」「ちょっとした政令指定都市のおもむきを持つにもか

かわらず、ほんの一部の人々しか貸出サービスを利用しないのだ。しても本屋でひょいと買えるような新刊本ばかり」(vol.29, p.162)本を扱うマナーが悪いし、催促しても返さない、書物の遇し方を知らない連中が多すぎるし、『ブリタニカ国際大百科事典』を持ち逃げした例もある、「レファレンス・カウンターなどは存在しないに等しい」「配架、貸出、館内の見まわり……基礎業務の域を出ないこと入職当初となんら変わるところがない」(vol.29, p.162)館長のゴルフ談義の相手をし、高校生の私語をたしなめ、老人にソファで熟睡しないよう注意していると「自分が司書なのか、それとも一種の倉庫番なのかわからなくなってしまう感覚に襲われた。しょせん図書館など知の宝庫ではない。単なる無料貸本屋か、そうでなければコーヒーを出さない喫茶店にすぎないのだ。少なくとも市民の目にはそうなのだ」(v.29, pp.162-163)と、和久山は考えている。

図書館が行政や市民からどのようにみられているかについて、悲観的な見解が連ねられ、レファレンス・カウンターの担当職員である和久山が、就職当初は意欲をもっていたものの、それを失い、高いモラルを維持しにくい思いが率直に述べられている。

②では、「公民館も、ときにはつぶれる」(v.30, p.148)とあり、峰杉公民館は、昭和三十一年(一九五六年)の完成で、その二階には「N市立図書館分館」があり「名目は図書館分館ながら、実質はまったく児童図書室」(vol.30, p.150)であった。「N市立図書館において児童書コーナーは一種の独立国の様相を呈している。独自の貸出・返却カウンターを持ち、独自のイベントの企画を立て」「児童書に関してのみだが利用者の調査相談にもその場で応じる」(vol.30, p.156)ということである。

③では、N市立図書館の副館長として、市長秘書室から喜多田直次が転属してくる。この時点で図書館長は、高田忠で「調査相談課の課長でもある」「お飾りの域を出ない地位はこれを館長が兼務」しているのは「人手不足」(v.31, p.287)のためである。

「N市立図書館の事務室は、三階」「約九十坪のフロア」(vol.31, p.288)であり、職員全体では「総務、管財、児童書担当……アルバイトおよびボランティアを除く全職員」「約三十人」「N市立図書館の調査相談係には、現在、ふたりの職員が所属して」いて、それが、和久山隆彦と榎本国雄(vol.31, p.284)である。

喜多田は『図書館というのは、はたしてN市にほんとうに必要なのだろうか』『お金の使いどころを誤っ

ている」と言う。救急センター、市営住宅、ごみ処理施設、などが未整備なのに「図書館などという腹の足しにもならぬ文化施設に少なからぬ予算をぶちこむとは本末転倒もはなはだしい、分不相応この上ない」「図書館が、図書館でなければ果たせない機能をしっかり果たしている」のか、「貸出の実績を見ても、購入図書の一覧を見ても、事実上、無料貸本屋ではないか。そんな仕事ならわざわざ自治体が手をわずらわせることはない、書店なり新古書店なりの大手チェーンを誘致するほうがいいだろう。レンタルショップを併設させれば視聴覚資料もまかなえる。市民の生活文化度はそこなわれないし、市は新たな税収が期待できる」(vol.31, p.285)と、職員に対する新年と着任のあいさつで演説する。「『切るべきものは切れ、削れるべきものは削れ』『切り捨ての候補のうちの最大のものが、つまりはこの図書館というわけだ。企画課あたりを中心に、存続派と廃止派がいろいろ議論を重ねている』」(vol.31, p.291)が「『市長はいまのところ図書館の存廃に関しては態度を明確にしていない』」(vol.31, p.302)とある。

④には、図書館スタッフとして、実習生の「都内の大学に通う四年生」が登場する。「いくら大学で『図書館概論』だの『レファレンスサービス演習』だの、もっともらしい名前の講義を受けたところで、現場へ来れば何の役にも立たないのは毎年、どの実習生も同じだからだ」(vol.32, p.310)という。「三週間の予定」で「都内の大学から図書館実習生を受け入れるという古くさい慣習」「学生なんぞ、手伝われば手伝わせるほど図書館の業務はどこおるいっぽう、迷惑この上ない」「受け入れておけば後日、大学からの謝金がふりこまれるのがこの世界の暗黙の了解になっている」(vol.32, p.313)この学生は、授業よりもウィンドサーフィン部の活動に熱心で、「司書資格の修得をこころざしたのも、おおかた一般企業への就職に役立つと誤解したせいだろう」(vol.32, p.310)とある。

前回登場した、喜多田直次は、一月に、副館長として赴任し、「いきなり図書館無用論をぶちあげた」が、「四月一日」「館長の定年退職にともない」「館長へと昇格し」「本庁へみずから足を運び、N市の一般会計から図書館への支出をざっくり削るよう申し出」「館内の部下に対してはさまざまな業務の見直しを命じ」読み聞かせ会、映画上映会、図書展示会、実施せず、副館長は空席のままで、二分館は廃止するという。(vol.32, p.313)一方、喜多田は和久山との対話で「『家に帰れば未読の本の置きどころには困っている』

『かりに読書が好きだとしても、読書家は嫌いだ』」(vol.32, p.315)と述べ、ある議員のケースをあげて「『本は酒とおなじだ。ほどほどにしないと体をむしばむ。むしろ本のほうが、たちが悪いかもしれないな』」(vol.32, p.316)と発言しているところもある。やがて市議会の文教常任委員会では、図書館の存廃を討議することになる。

⑤で和久山は、市会議員である増川弘蔵の自宅へ向く。委員会で演説する原稿の執筆を依頼され、草稿を用意するが、「『このとおりに演説したとしたら、間違いなしに列席者たちの失笑を買うね。説得なんか思ってもよらない』」(vol.33, p.160)といわれてしまう。文教常任委員会は七人で、委員会を通過すれば、本会議は単なる追認機関であり、図書館の廃止が決定する。五人の与党会派で、存続・廃止が二人ずつなので、賛否を表明していない、香坂貴子委員の対応が問題となる(vol.33, p.131)。彼女は、二年前の選挙で初当選したが、N市の下町の公立小学校出身を強調していた。慶応の法学部を出て大学院に進学し、博士課程に籍がある。和久山は、文教常任委員会での図書館存続について訴える草稿づくりに関して、児童書担当の藤崎沙理に相談し、香坂議員の経歴から「『法律という要素と、図書館存続論という要素を結びつけて論じればいいんです』」(vol.33, p.139)というアドバイスを受ける。

N市図書館条例の一部改正に関する委員会が開催され、図書館長の喜多田は、着任の際に、図書館員の前で演説したように、図書館よりもほかの事業に行政の経費を使うべきとの自説を述べる。それに対して和久山は、日本は法治国家であり、法律はあらゆる支配の根拠である、法律は文字のつらなりであり、法治国家とはテキスト国家である、大事なことは印刷物により知らされる、私たちは文字を読むという行為から逃れられない、文字を読む能力をやしなうのは書物である、図書館を利用する人は少数でも、公金を投じる意義がある、と主張する(vol.33, pp.144-146)。この回の最後の場面で、香坂貴子議員は、「民間委託」(vol.33, p.146)という新しい案を示す。

⑥では、民間委託の提案は、5年前にもあったが、表決にも持ち込めなかったことが明らかにされる(vol.34, p.102)。結局、他にも議題をかかえている文教常任委員会では、図書館廃止については採決されず、図書館の存続が決まる(vol.34, p.105)。和久山と昼食をともにしながら、喜多田館長は、自ら「市政秘書室長」に転出し、和久山にも、そちらに異動するよう

に告げる (vol.34, p.107)。和久山は図書館から「総務課の下企画グループ」(vol.34, p.114)に配属されることになった。

異動を控え、和久山が図書館に勤務する最後の日、N市長、坂本経成、その人が、レファレンス・カウンターにやってくる。和久山が委員会で参考人として意見を述べた際の「参照した書籍のリスト」を見たいという質問に、『私はあれを書くために、ただの一冊も本の助けを借りていません』と回答する。さらに『レファレンス・カウンターは調査を助ける存在です。調査そのものは相談者自身がしなければならない』『最終的な解決はあくまでも人間自身がおこなわなければならない』と話す (vol.34, pp.114-116)。

『レファレンス・カウンターの職員は誰よりもレファレンスブックを使いこなさねばならない』(vol.30, p.153)「調べものの能力というのは日ごろの訓練に負うところがきわめて大きく、その点でスポーツまたは職人仕事に近い」「経験のあるなしが決定的に事を左右する」「先達の責任はとても重い」(vol.30, pp.159-160)などレファレンス・カウンターでの業務についての記述がある。地階の閉架書庫で、出題の内容をレファレンス担当のふたりで検討している場面では「カウンターで相談を受け、ひととおり利用者へインタビューしたら、ただちに体を動かすのがこの仕事の常道」「正解は畢竟、実行の先にしかない」(vol.31, p.289)という対話がある。また和久山は喜多田館長に「図書館にはレファレンス・カウンターがあり、そこには人間がいるんです。コンピューターにはぜったい代わりの務まらない、血の通った人間が。そうしてその点こそ、図書館という地味な施設のレンタルショップや貸し本屋とは決定的に違う点」であり、回答は「もっと肉体的な、具体的な作業の終着駅」で「或るきっかけで頭脳が猛烈に回転しはじめ、正解をはじきだすことができた。頭脳のみで思考したのではとても無理」だ (vol.31, p.303)と主張している。

図書館の「レファレンス・カウンター」でのサービスが上げられ、そこでの図書館員の対応や情報を提供する様子、利用者の反応が、ストーリーの一部に描かれているケースは、図書館や図書館員が登場する作品の中でもみられるが、雑誌に連載される中で、毎回、課題が設定されて、それに対して図書館員が回答を提示し、それと並行して図書館を取り巻く地方財政事情が実態に近い形で描かれるケースはこれまであまりなかった。

レファレンス・カウンターで提示される「難問」の内容は、①森鷗外の本名に類似した名前の文学関係者の著書、②子どものころに見た記憶がある赤い富士山が表紙に描かれた児童書、③管理職が試験的に提出したある特性をもったタイトルの本、④故人が返却しないままになっている「ハヤカワの本」、⑤⑥石原慎太郎「太陽の季節」と類似したエピソードが含まれている小説、であり、いずれも図書や文学に関連したものになっている。現実の公共図書館では「これからの図書館像」などでも示されているように、「役に立つ図書館」、ビジネス支援に代表される「* * 支援サービス」が強調されており、そうした方向を打ち出すことによって、これまでとは異なる層の利用者を図書館にひきつけたり、地方自治体が限られた予算の中から一定の経費を投入することに対する説得力のある材料となることが期待されているが、そうした主題の課題は、「レファレンス・カウンターの難問」には登場しない。

ただ、最終話では、日本は法治国家であり、法律が文字で成り立っていることと、図書館との関係が主張されている。一方で、和久山は『書店にない本が読みたいとか、何冊もの事典や辞書をいっぺんに見くらべる羽目になったとか、あるいは自分の主題に見あう本がどれなのか見当もつかないとか、そういう非常の——けれども案外よくある——状態におちいった人間のために存在するのです』(vol.33, p.146) そうじゃない人——夏休みのひまつぶしに涼みに来るだけの若者、お金がもったいないというだけの理由で人気作家の新作をごっそり借り出す老人——もいるが、それは『個人的にはたいへん情なく思う』が『彼らのために図書館そのものの価値はみじんも傷つけられはしません』(vol.33, p.146)と述べており「これからの図書館像」にみられる方向性をとの協調を感じさせる¹⁶⁾。

ここで登場している図書館員の和久山は、大学で司書資格を取得し、意欲をもって自治体の図書館に就職したが、業務をこなしていくうち、「図書館という施設がかならずしも行政機構全体において枢要な位置を占めないと気づいてしまった」(vol.29, p.162)結果、官僚的な受け答えに終始することもめずらしくなくなり、女子大生の利用者にそれを指摘されても、否定できないと感じている。しかし、行政から異動してきた管理職が、図書館廃止の方針を打ち出すと、それに対抗しようとする。ただ、館長になって経費削減を断行し、委員会で図書館の廃止を主張する喜多田も、研修と称して、図書に関係した領域の問題を出題している。「正反対の立場」なんだという二人だが、実習生には

『『おなじに見えますけど、僕には』』(vol.32, p.329)とされている。現実には図書や文学に関心が低く、経費の削減にのみ執着する行政担当者に対応する必要が生じているのが現在の図書館であろう¹⁷⁾。

4. 図書館法改正と図書館のイメージ

『週刊文春』に掲載されたインタビューで、女優の広末涼子は、阿川佐和子との会話で、「阿川：大学には何年いたんですか」「広末：籍をはずしたのは七年目です。長く在籍させてもらってよかったな、と思うのは、図書館での時間ですね。早稲田は図書館も充実していて、学生証があると全部使えるから。授業に出られなくてもいい時間を過ごせました」「阿川：図書館で勉強してたの？」「広末：勉強というよりも、言葉とか知識に執着心があって。インタビューでいろんなことを出すのも仕事だから、どんどん入れないと空っぽになっちゃう不安があったんですね。当時は、本を読むのも映画を見るのも全部不安を埋めるためだった感じがします」「阿川：図書館でどんな本を読んでたんですか？」「広末：国文学科だったので漱石とか日本の近代文学も読みましたけど、感情を表現するお仕事だから、そこからちょっと離れたい感覚があって、客観的に向かい合っていたのが哲学書だったんですよ」(中略)「阿川：じゃ、大学は授業に出なくても貴重な時間だったんですね」「広末：はい」と述べている¹⁸⁾。大学の図書館が、資料提供とともに「場」としての機能をもっていることを、利用者のがわから提示している事例といえよう。

一方、多数の小説の著作に加えて、エッセイも刊行し、一方で、研究者でもある森博嗣は、『MORI LOG ACADEMY』(2008.8.19)において、「国立大学(法人化したのもうないのだが)には、たいいてい図書館がある。また、各学部や各学科にも図書館(あるいは図書室)がある。たとえば、職員が自分の研究に必要な本がほしいときは、自分に割り当てられた図書費から支出して購入する。けれど、その本は図書館の所有物となり、個人のものではなく、誰でも借りられる共有物という扱いだ」「今後、図書はほとんどデジタル化し、ネット化するだろう。現在ある図書館なる建物は、単なる歴史物を収納する倉庫になる可能性が高い」と記述している¹⁹⁾。大学の研究・教育の場面において、情報源となる資料やその資料提供という機能は、電子メディアにシフトして行くであろうことを予測している。

もとより、図書館法が、対象としているのは、主として公立図書館であり、大学の図書館は対象外であるが、館種を問わず、図書館のもつ機能の一部は、電子メディアの普及によってそちらにシフトしていくであろうことは間違いない。しかし一方で「場」としての機能は、一定程度存在し続けるだろう²⁰⁾。そうした変化の中で、図書館という施設やそこで働く職員はどのようなイメージでうけとめられることになるのであろうか。日本の市町村立図書館は、専門的な知識技術をもつ職員の存在について、あるいはその役割について、十分な広報を展開し、存在意義を社会的に定着させることに成功してきたとはいえない。今回取り上げた中でも「司書」という言葉は、すべての作品で、使われていたが、それが実際の現場の状況を反映したものになっているとはいえない。そうした状況に対して、図書館法改正がもたらす未来像は、どのようなものになるのだろうか。

5. おわりに

2008年4月からは、有川浩『図書館戦争』がアニメで放映され、そこでは、「図書館の自由法」という架空の法律が設定されていた²¹⁾。9月には、NHK テレビ「生活ほっとモーニング」では50分間にわたって、図書館に関する話題が番組の中でとりあげられた²²⁾。図書館法が改正された年に、映像関係でも図書館をとりあげた事例があったといえよう。

本稿の前半で取り上げた作品に描かれたキャラクターが勤務している、国立国会図書館や学校図書館(高校の図書室)は、図書館法の対象ではなく、「司書」資格とも直接関係はない。にもかかわらず、それぞれの作品では「司書」という言葉が図書館に勤務する人物をあらわす、一般的な名称として使われていた。「司書」資格について扱っているのは図書館法のみであり、そうした点からみると、図書館法が公共図書館以外の館種をふくめた、図書館状況全体にも一定の影響を及ぼしていると考えられる。

図書館法は、さまざまな課題を内包しながらも、この法律が今後の図書館の活動に一定の影響をもつことは否定できない。法改正の年に、文学作品に取り上げられた図書館について事例を検討する中で、幾つかの点が明らかになってきた。

「司書」は図書館ではたらく人々の呼称として使用されているが、「司書」資格や職員の配置状況について、正確な理解が定着しているとはいえない。そう

した状況で「レファレンス・カウンターの難問」には、レファレンスサービス担当の専任職員が存在し、毎回簡単には解決できないような課題について、資料を駆使して回答する、また、行政や議会の関係者に一定の助言を行っている、などの点で、画期的な内容が含まれていた。さらに、近年の図書館を取り巻く状況を反映して、レファレンス担当職員が高いモチベーションを維持しにくい、行政からコストカットを目標とした管理職が異動して業務を遂行する、議会の委員会で図書館が話題となり、民間委託が提案される、などの点は、現状のいくつかの自治体で直面している事態に類似したものとなっている。

図書館法改正が、図書館イメージの変革や、利用者が図書館に求めるサービスや職員体制の変化に、大きなインパクトを与えるものとなるかどうかは、その運用によるところが大きいと思われる。それが今後どのような変化を図書館にもたらすのか、法改正と同じ年に文学作品で描かれた図書館のイメージは、その一端を予測させるものになっていたといえるのではないか。

注

1. はじめに

1) 『図書館雑誌』2008年9月号には、「特集★図書館法の改正をめぐって」が掲載されている。()内は、文末に示された、執筆者の肩書き。

図書館雑誌編集委員会「特集にあたって」『図書館雑誌』Vol.102, No.9, pp.633

栗原祐司(文部科学省生涯学習政策局社会教育課企画官)「図書館法等の改正と今後の課題について」『図書館雑誌』Vol.102, No.9, pp.634-637

松岡要(日本図書館協会常務理事・事務局長)「国会審議への日図協の取り組み」『図書館雑誌』Vol.102, No.9, pp.638-641

志保田務(JLA 図書館学教育部会長)「大学司書課程科目制定に関する日図協図書館学教育部会としての取り組み」『図書館雑誌』Vol.102, No.9, pp.642-645

山本順一(桃山学院大学経営学部)「何のための図書館法改正だったのか」『図書館雑誌』Vol.102, No.9, pp.646-648

2) 栗原祐司(文部科学省生涯学習政策局社会教育課企画官)「図書館法等の改正と今後の課題について」『図書館雑誌』Vol.102, No.9, pp.634-637

3) 山本順一(桃山学院大学経営学部)「何のための図書館法改正だったのか」『図書館雑誌』Vol.102, No.9, pp.646-648, では、「図書館法は情けないことに、‘パッケージ資料’にとどまり、インターネット情報源と図書館サービスの関係については愚かにも沈黙を続けている」「結局のところは人件費踏み倒しの下請けアマチュアボランティアをこき使おうとしているにすぎない」など

の表現がある。

4) 財団法人・全日本社会教育連合会『社会教育』2008年10月号では、「総力大特集 社会教育法, 図書館法, 博物館法 改正の視座—新しい時代を創る社会教育に蘇生できるか」を掲載している。()内は、目次等に示された、執筆者の肩書き。

鈴木真理(青山学院大学教授)「社会教育法三改正の意味と社会教育の今後の方向」pp.6-11

坂本登(常磐大学教授)「社会教育法等の一部を改正する法律案に対する『附帯決議』の意味を考える」pp.12-19

栗原祐司(文部科学省生涯学習政策局社会教育課企画官)「教育基本法改正から社会教育3法成立までの経緯」pp.20-24

文部科学省生涯学習政策局社会教育課「法改正の要点」pp.26-29

誌上シンポジウム「社会教育はどう蘇るのか 社旗教育3法を読む」pp.31-52

栗原祐司(文部科学省生涯学習政策局社会教育課企画官)

菊川律子(独立行政法人国立青少年教育振興機構理事)

中川志郎(財団法人日本動物愛護協会理事長)

葉袋秀樹(筑波大学大学院図書館メディア研究科教授)

角替弘志(常磐学園大学副学長): 司会

松崎雅蔵(仙台市生涯学習課 主査権社会教育主事)「現場からの声 社会教育法改正について思うこと」pp.54-55

松田公利(和歌山県立図書館主査司書)「現場からの声 図書館改正について思うこと」pp.56-57

布谷知夫(滋賀県立琵琶湖博物館 上席総括学芸員)「現場からの声 博物館法も大事だけれども」pp.58-59

「政策資料: 新旧対照表」社会教育法, 図書館法, 博物館法, pp.60-69

全体で140ページあまりの雑誌の約半分におよぶページが、特集関連の文章で埋められている。

5) 図書館法自体の一般的知名度からいっても、また、発表の時期からみても、今回取り上げた作品が、直接的に図書館法改正の影響を受けているというわけではない。法改正が行われたのと同じ年代に、一般的な図書館のイメージがどのようなものであったかを検討する素材としてとりあげた、ということである。

2. 受賞作家・受賞作品と図書館

——『決壊』『ぼくは落ち着かない』

『吉野北高校図書委員会』

1) 平野啓一郎『日蝕』新潮社, 1998

1998年下半期, 第120回芥川賞を受賞している。

「BE BACK HIGH SCHOOL 第70回 福岡県立東筑高校 平野啓一郎(小説家)」『読売ウィークリー』2008.9.28, p.16, では、「京大法学部在学中、『日蝕』で第120回芥川賞を受賞」「運動は苦手ではなかったが興味がなく、集団行動もあまり好まなかった平野は、

“帰宅部”に徹した』『『基本的には図書室で読書する、自宅でギターを弾く、音楽を聴く——と、ひとりで放課後を過ごしていましたね』と紹介されている。

2) 平野啓一郎『決壊 (上)』新潮社, 2008

平野啓一郎『決壊 (下)』新潮社, 2008

なお、「沢野崇」とは別に、一連の事件の実行犯であったと目される人物の「篠原勇治」について「少年時代からの読書の習慣は途絶えなかったようで、事件後、複数の図書館の司書が、篠原の来館の事実を証言している。実は、彼は、沢野崇さんが勤務していた国会図書館にも、度々足を運んでいたことが確認されており、それが今以て、篠原は単なる実行犯に過ぎないとする、『沢野隆首謀説』の根拠となっているが、両者の接点については何の証拠も得られてはいない」(下巻, p.314)という記述がみられる。

3) 収集書誌部収集・書誌調整課：河合将彦「CA1674—『男性図書館員』の肖像」『カレントアウェアネス』No. 298, 2008.12.20 (<http://current.ndl.go.jp/ca1674>) では、『決壊』の主人公について、「従来フィクションで描かれてきた多くの図書館員とは少し異質であり、東大を出たエリートで、海外の大使館に出向するなど将来も有望」と紹介している。

コミック作品として、「国木田陽一 24歳。図書館勤務」という「男性図書館員」をメインキャラクターとする、朔ユキ蔵『セルフ』が、週刊コミック誌『ビッグコミック・スピリッツ』に連載中(2008年12月末現在)で、単行本は、1巻、刊行されている。1巻までのストーリーで、この人物が勤務するのは、外壁に「緑区中央図書館」と表示(p.11)のある施設で、館内で担当している業務内容は、カウンタでの利用者対応や、書架整理であり、特に専門的な資格や知識・技術の必要性が強く感じられるものではない。

朔ユキ蔵『セルフ①』小学館, 2008

4) 長嶋有『猛スピードで母は』文藝春秋, 2002

2002年下半期, 第126回芥川賞を受賞している。

5) 長嶋有『ぼくは落ち着きがない』光文社, 2008

同書の表紙カバーには「1972年生まれ。東洋大学2部文学部国文学科卒」とある。

本の表紙紙うらには、「図書室イメージ図」が描かれており、室内は、入り口のスイングドアを入ると、円形書架が置かれ、右手に、長机と書架3連、がある。入り口方向を振り返ると、廊下側のかべに接して、職員が貸し出して続き処理などの作業をするスペースがあり、フロアとは、カウンターで区切られ、カウンター横にも書架がある。図書館入り口から左手に進んだ方向には、仕切り板(ベニアの合板)があり、ドアもつけられている。この向こう側は、図書部部室になっていて、机や机が中央部に置かれ、いちばん奥のかべ際には、書架が設置されている。このスペースには、水道の蛇口と流し台、冷蔵庫、ガスコンロなども設置されている。

6) この本をとりあげている「ナナメモ」(nanamemo.jugem.jp) 2008.9.2, では、「図書館で借りた本だったのですが、表紙の裏になにやら文字が…長嶋さんってこ

のパターンが多いですね。気になる～本屋さんに行ってもこなきゃ」とある。さらに「コメント」では、「私も図書館で借りたんですけど、やっぱりカバーうらに仕掛けがあるみたいです」(ちきちき), 「裏表紙気になりますよね」(なな), 「裏表紙に何か書かれているんですか?それは気になりますね。私も図書館本なので、読めないです」「長嶋さんは本購入者を大切に思っているんじゃないですかね」(なな), という対応をしている。なお、ここで「裏表紙」とあるが、実際は、着脱可能な、表紙カバーの裏に書かれている。

「本のことも」by 望月 (kotodomo.exblog.jp) 2008.8.25, では、「要するに、図書館で借りると、表紙は糊付け、もしくはコーティングしてあるので、表紙の裏の文章まで読むこと出来ないだろう、ザマーミロ、ワーイということである」との指摘がある。この人物の利用している市立図書館では「表紙カバー裏をコピーし、巻末に貼り付けているので、“登場人物たちのその後”について、借りて読んだ評者も読むことが出来た」とされている。

7) この表現の背景には、図書館員よりも作家の方を上になす価値観が共有されているであろうという、作者の思いが存在しているとも考えることもできる。

8) 山本渚『吉野北高校図書委員会』メディアファクトリー, 2008

文庫本カバーには「1979年、徳島県に生まれる。徳島県立城北高校に在学中、図書委員を務める。香川医科大学看護学科卒業。主婦業のかたわら書いた『吉野北高校図書委員会』で、その瑞々しい感性が注目を浴び、第3回ダ・ヴィンチ文学賞 編集長特別賞を受賞しデビュー」と記されている。

3. 「レファレンス・カウンターの難問」

1) 北村薫『空飛ぶ馬』東京創元社, 1989, をはじめとした一連の作品が、知られている。

東京創元社のホームページで、『空飛ぶ馬』(創元推理文庫)は、「『私たちの日常にひそむささいだけれど不可思議な謎のなかに、貴重な人生の輝きや生きてゆくことの哀しみが隠されていることを教えてくれる』と宮部みゆきが絶賛する通り、これは本格推理の面白さと小説の醍醐味とがきわめて幸福な結婚をして生まれた作品である」と紹介されている。

(<http://www.tsogen.co.jp/np/detail.do?goodsid=1661>)

2) 大崎梢『配達あかずきん 成風堂事件メモ』東京創元社, 2006

大崎梢『晩夏に捧ぐ 成風堂事件メモ出張編』東京創元社, 2006

大崎梢『サイン会はいかが? 成風堂事件メモ』東京創元社, 2007

なお『配達あかずきん』は久世番子により、コミックでも刊行されている。

久世番子・大崎梢『配達あかずきん』新書館, 2008

なお、久世番子には、コミックの裏表紙カバーに「新感覚『本が大好き』エッセイコミック」と記載されている、次の作品がある。

- 久世番子『番線——本にまつわるエトセトラ——』新書館, 2008
- 3) 小路幸也『東京バンドワゴン』集英社, 2006
小路幸也『シー・ラブズ・ユー 東京バンドワゴン』集英社, 2007
小路幸也『スタンド・バイ・ミー 東京バンドワゴン』集英社, 2008
- 4) 門井慶喜「レファレンス・カウンターの難問」『GIALLO (ジャーロ)』
「社団法人 日本雑誌協会」のホームページで公開されている「JMPA マガジンデータ」によると、『GIALLO (ジャーロ)』の発行部数は、4,700部 (2008年4月～6月, 印刷証明付部数) である。
(<http://www.j-magazine.or.jp/magdata/index.php?module=list&action-list&catlcd=3&cat3cd=1>)
- 5) 東京創元社のホームページ (<http://www.tsogen.co.jp/>) で公開されている「Web ミステリーズ」によると、門井慶喜は、「1971年群馬県生まれ。同志社大学文学部卒業。「キッドナッパーズ」で、2003 (平成15) 年、第42回オール讀物推理小説新人賞を受賞」している。
- 6) 門井慶喜『天才たちの値段』文藝春秋, 2006
- 7) 門井慶喜『人形の部屋』東京創元社, 2007
- 8) 「Web ミステリーズ」では、「美術ミステリとしての濃厚な面白さと新人離れした完成度で話題となった。豊富な知識を縦系に、物語を横系に独自のミステリを織り上げる気鋭」と紹介されている。
- 9) ①「図書館ではお静かに」『GIALLO (ジャーロ)』vol.29, 2007.10, pp.156-171
②「赤い富士山」『GIALLO (ジャーロ)』vol.30 2008.1, pp.148-167
③「図書館滅ぶべし」『GIALLO (ジャーロ)』vol.31 2008.4, pp.282-303
④「ハヤカワの本」『GIALLO (ジャーロ)』vol.32 2008.7, pp.308-330
⑤「最後の仕事」(前編)『GIALLO (ジャーロ)』vol.33 2008.10, pp.128-146
⑥「最後の仕事」(後編)『GIALLO (ジャーロ)』vol.34, 2009.1, pp.100-117
- 10) web で公開されている「全国高等諸学校図書館協議会『会報』全16冊 索引と一覧 web 版」(<http://www.ne.jp/asahi/bunko/enkaku/kaiho.html>) では、「1-1 協議題・事項索引 本編」「式辞及祝辞、挨拶」で「第1回 第三高等学校長 森外三郎 (代読 教授 林森太郎)」との記述がみられる。
- 11) 「Japan Knowledge」で検索すると、『日本人名大辞典』(講談社) を出典とする記述に「早川図書 はやかわ・ずしよ 1796-1859」「江戸時代後期の医師」「延岡藩の侍医」などの内容が確認できる。
- 12) 石原慎太郎『太陽の季節』新潮社, 1956
1955年度下半期, 第34回芥川賞を受賞している。
- 13) 武田泰淳『武田泰淳全集 第5巻』筑摩書房, 1971
武田泰淳「武田泰淳全集 第5巻 増補版」筑摩書房, 1978
「異形の者」は『武田泰淳全集 第5巻 増補版』筑摩書房, 1978, pp.52-81, に収録されている。
- 14) 開高健による「解説」は、『武田泰淳全集 第5巻 増補版』筑摩書房, 1978, pp.459-466。
「レファレンス・カウンターの難問」が引用 (vol.34, p.112) している部分の続きで、開高健は「いつの時代でもめくら千人です」(p.461) と述べている (開高健の原文が発表された時代を考慮し、そのままの表記を示した)。
- 古林尚による「解題」は、『武田泰淳全集 第5巻 増補版』筑摩書房, 1978, pp.467-472。それによると「異形の者」は「雑誌『展望』の昭和二十五年四月号に発表」(p.468) とされている。
- なお「異形の者」は、日本ペンクラブのホームページ (<http://www.japanpen.or.jp/>), 「電子文藝館」の「物故会員」ページで公開されている。
- 15) 他の回では、「N市の人口三十万人」(vol.32, p.319) としているところもある。
- 16) 和久山の主張は、図書館員が、ある種の利用者層を「情けなく」思い、「図書館そのものの価値」を「傷つけ」ていると決めつけているのは、住民全体の中から一定の層を切り捨て、図書館の存続目的にかなう利用者のみを取り込もうとしているという印象をあたえる点で、提供者志向の発想と言えなくもない。
- 17) たとえば、「児童文学館の利用実態調査 橋下知事『隠し撮り』『読売新聞 (大阪本社版)』2008.9.6 (夕刊) p.11, で「私設秘書を使って利用実態をひそかに撮影していた」「隠し撮りについてはこの日同図書館を視察後に明らかにした」ことが、新聞報道された。
- また、こうした状況について、山本順一 (桃山学院大学経済学部教授) は「国会においても、地方議会においても、頻度はともかく図書館が議題に上がった場合には、与野党、政党政派を問わず、総じて図書館整備については“好意的”である」が「十分な財源は与えられず、質量ともに適切な人材の配置が考慮されることも少ない」「文部科学省は見事な目指すべき方向を明示している。しかし“絵に描いた餅”をぶら下げるだけで実現に向けての仕組みはできそうにない」「地方公共団体も、いまのところ、それぞれの地域社会に見合った高水準のサービスを実現するカネもチエも十分に搾り出そうとするようには見えない」(pp.150-151) と述べている。
- 山本順一「日本社会に見合った水準の図書館サービスはいかにして実現できるか 日本の図書館にかかわる法制度の構造と課題」『別冊 環 ⑮ 図書館・アーカイブズとは何か』藤原書店, 2008, pp.142-151
4. 図書館法改正と図書館のイメージ
- 1) 「阿川佐和子のこの人に会いたい 第724回 女優 広末涼子」『週刊文春』2008.8.28, vol.50, no.33, pp.50-54
その経歴は「'99年早稲田大学入学 (後に中退)」と紹介されている。
- 2) 森博嗣「大学の図書」『MORI LOG ACADEMY 12』メディアファクトリー, 2008.12, pp.330-331

3) たとえば、フリーアナウンサーで、現在「東京成徳大学で博士課程を聴講」しているという、梶原しげるは、「昔から知的であることに対するあこがれが人一倍強くて、そのせいか図書館が大好き。時間があれば行っています」「大学に行くと図書館に寄れるのもいいですね。本に囲まれていると独特の心地よさがあって、知的な空間にいることに自己満足を覚えるんです」と述べ、「女性と仕事の未来館」にある図書館が、「館内が清潔で人が少ないのがいい」と「今一番のお気に入り」として紹介している。

「JT ディライトフォーラム vol.8 フリーアナウンサー梶原しげるさん」『日刊ゲンダイ』2009.1.24, p.38

5. おわりに

1) 『図書館戦争』はフジテレビ系列で、2008年4月から放映された（テレビ局により放映日は異なっている）。DVD も順次発売されている。

2) 2008年9月3日、午前8時35分から9時25分まで、50分間にわたって、生放送された。「読書の秋 図書館を100倍楽しむ」というタイトルで、図書館関係者では、慶応義塾大学の糸賀雅児教授などが出演した。

（本文中で参照したホームページは、2008年12月の時点で、公開されていた内容です）